

「満  
たす  
ひと  
」

ワ  
カ  
ハ  
ラ  
ダ  
イ  
ス  
ケ

●登場人物

※複数の人物を1人の役者が演じるケースも想定。

春川勘太郎：1920年生まれ。主人公。

春川祥子：1901年生まれ。勘太郎の母。

白川月日：1893年生まれ。料理人。

音無文子：1920年生まれ。勘太郎の友人。

親七光：1920年生まれ。勘太郎の友人。

意地悪男：1920年生まれ。勘太郎の友人。

野江大伍：1898年生まれ。現場作業員。

増田昭二：1895年生まれ。現場作業員。

金八先正：1904年生まれ。教師。

山尾益男：1920年生まれ。勘太郎の同僚。

伊勢崎正平：1898年生まれ。御曹司。

大城平八郎：1915年生まれ。料理人。

辰巳和彦：1912年生まれ。料理人。

猪竹勝：1907年生まれ。帝国軍中尉。

春川千太郎：1950年生まれ。勘太郎の息子。  
子。

豪田：1902年生まれ。料理人。

● 舞台構造のイメージ

平面の舞台に大きな箱（机にもキッチンにも見立てられるもの）が上手と下手に配置。小さな箱（椅子に見立てられるもの）も数個散らして配置。場転に際してこれらを役者が適宜配置変えを行い、様々な場所を表現する。

1 勘太郎の家（昼）

1930年7月。春川勘太郎（10）と春川祥子（29）が向かい合って飯を食べている。見るからに質素な献立。ぐー……と腹の音が鳴る。

祥子 「勘太郎、ごはん足りないんか？」

勘太郎、気を使っているのか首を振る。

勘太郎、またしても腹の音が鳴る。よだれを垂らしながらもまだ我慢する。

祥子 「子供が我慢せんでええねん」

祥子、笑いながら勘太郎に無理やりごはんを食べさせる。

祥子「おいしいか？」

勘太郎、こくりと頷く。

勘太郎「でも、オカンの方がお腹すいてるんとちゃうんか」

祥子「そんなわけないやろ！ お母さん、お腹いっぱいやで」

と、ここで祥子のお腹がぐーと鳴る。  
間。

勘太郎「あーーやっぱり！」

祥子「えーい！ やかましい！」

祥子、勘太郎に無理やり米を食べさせる。勘太郎、口いっぱいに米を頬張りながら、涙を流す。

勘太郎「おかん…」

祥子「ええねん、ええねん。うちは勘太郎がお腹いっぱいになってるところが見られればそれでええ」

祥子、食卓を片付けはじめ。舞台中  
央に成長して大人になった勘太郎（幼

少期の勘太郎とは別の役者が望ま  
しい）が現れ、舞台中央に立つ。

勘太郎 「そう言ったオカンの顔。あの飯の味  
が今でも忘れられへん。オカンはなんで笑  
ってたんやろうか。もっと早く気づいてい  
れば、俺は……」

暗転。

## 2 春川家の定食屋（朝）

「1934年11月」という文字が舞  
台に浮かび、明かりが灯る。そこは祥  
子が営む小さい定食屋。祥子は手ぬぐ  
いを頭に巻いて、厨房で作業をしてい  
る。勘太郎（14）が店のテーブルを  
拭いている。カウンターには野江大伍  
（36）が座っている。野江は現場作  
業服を着ており、料理を待っている様  
子。そこに同じく作業服を着た増田昭  
二（38）も入ってきて、

増田 「おう！ おはよう。かんちゃん。今日

も手伝いえらいなあ。祥子さんいつもの頼むわ」

勘太郎「増田のおっちゃんも朝からよー来るなあ。こんなきたねえ店に」

祥子「増田さん、あんま褒めなくてええよ！食堂の息子やったら当たり前のことやん」

野江「そうやなあ。おい、勘太郎。お前、慎太郎さんがいなくなつて、祥子さんも大変なんやから。お前がしっかり支えや。ええな？」

勘太郎「はあい」

祥子が配膳をしてくる。

祥子「はい、オムレツ定食おまち。今日も特別に大盛にしてるから！たくさん食べて、現場仕事がんばってや！」

野江「いつも悪いなあ、祥子さん。歯が悪いから野菜もこまこー切つてもろて」

祥子「ええ、ええ。野江さんは常連なんやから」

勘太郎「オカン！ また勝手に大盛にして！

そんなんやからうちはいつまで経っても貧乏なんや！ 自分らの食う飯の分も考えーや！」

祥子、勘太郎をゴツンと殴る。

祥子「私はこれでええんよ！ 文句いうなら自分で稼げるようになりや！」

勘太郎「言われんでも稼いだるわ！ こんなきったねえ食堂よりでっかい店作つたるかな！ 華やかな世界で立派な料理人になるからな！ 見とれや！」

増田「ははは、そらあ楽しみにせなあかな」

祥子「勘太郎！ あんた、そろそろ学校の間やろ。ついでにこの出前、隣町の後藤のおじいちゃん家に届けといたって」

勘太郎「はいはい！ いってきまーす！」

## 2 大阪の街（朝）

勘太郎、店の外に設置された自転車に乗って舞台中央へ。勘太郎が自転車を

その場で漕ぎだそうとする。すると舞

台上手から、親七光（14）と意地悪

男（14）がやってくる。（いかにも

いじわるそうなBGM付き）

親七「おい、父無し子（ててなしご）」

勘太郎「あ？」

意地「まゝたまずい飯運んでんのか？ 貧乏

野郎は大変やなあ」

親七「ぎゃはは」

勘太郎「どけや」

親七「あ？」

勘太郎「出前の邪魔やどけー！」

勘太郎、自転車をドリフトさせて、親

七と意地をぶつとばす。

意地「ぎゃあっ！」

親七「あああ！ パパに買ってもらった一張

羅が！？」

勘太郎「腹すかしとる客がおるからな！ 今

日はこんくらいにしといたらあ！」



逃げていく親七と意地。勘太郎、自転車をこぎだす。舞台の上手から下手へ、人々が流れていく。勘太郎の知り合いたちが次々と声をかけていく。

八百屋の男「おー、勘ちゃん！ 今日もはりきつとるねえ！ どうだい、大根安くしとくよ！」

勘太郎「悪いなおっちゃん！ また今度行くさかい！」

金八「おい勘太郎！ お前ー今日の宿題、ちゃんとやっとるんか？」

勘太郎「はーい！ やっとるやっとるやっとりまーす！」

上手から出てきた音無文子（14）が声をかける。

文子「かんちゃん、あまり速度だしてこけたらあかんよー」

勘太郎「うっさいボケ！ 文子、お前もトロトロしとったらまた下穿き丸出しでこけてまうぞ！」

文子「ひどーい！ それ忘れてって何度いったらわかるん！！」

勘太郎「ぎゃはは！」

勘太郎。舞台から去っていく。入れ替わりに下手から浮浪者（41）が現れる。今にも倒れそうな足取り。勘太郎が上手からまた現れる。

勘太郎「あー疲れた。後藤のじいちゃん、また同じ話しよって…。腹減ったなあ」

勘太郎、自転車の荷台から弁当を取り出す。

勘太郎「へへへ、出前後の早弁は格別やなあ」

勘太郎、弁当を口に運ぼうとすると…、じっと見つめている浮浪者に気づく。

勘太郎「な、なんや…」

浮浪者、とぼとぼと勘太郎に近づいてくる。

勘太郎「なにになになに！？ こわいこわい！！」

浮浪者 「うう…ああ…」

浮浪者、ばたつと倒れる。間。

勘太郎 「えっ!？」

勘太郎、慌てて浮浪者に駆け寄る。

勘太郎 「ちょ、おい! おっちゃん! こん

なところで死んだらあかん! (抱き寄せ

た瞬間) くっくさ!？」

勘太郎、鼻をつまみながら、ぺちぺち

と浮浪者の頬を平手打ちする。すると

「ぐく」という巨大な音になる。

勘太郎 「えっ!？」

浮浪者 「め…:…し…:…」

勘太郎 「ええ」

浮浪者 「腹…:…減った」

浮浪者、物欲しそうな目で勘太郎を見

つめる。

勘太郎 「そ、そんな言われても…:…」

勘太郎、逡巡するが、意を決して自転

車の荷台から、弁当の入った巾着袋を

出す。

勘太郎「これ……今日の俺の昼飯やけど、こんなんでよかったら」

浮浪者「お、おお……おお」

浮浪者、勘太郎から巾着袋をひったくり、無心で中身を食べだす。

勘太郎「ごめん、俺が作ったもんやから、おいしくないと思うけど……」

浮浪者「うううう……」

浮浪者、急に涙ぐみだす。

勘太郎「そんなにまずかった？」

浮浪者「うまい！！！」

勘太郎、仰天する。

浮浪者「うまい！　うまい！　……ご馳走様！」

浮浪者、勘太郎の肩をがっちりと掴む。

浮浪者「いや、助かった。三日間ずっと飲ま  
ず食わずで……本当に死ぬかと思った！

お前の名前は？」

勘太郎「か、勘太郎」

浮浪者「そうか。勘太郎。お前……うまい料理

を作るんだな」

勘太郎「え……」

浮浪者「この恩はいつか必ず返す。本当にありがとう」

去っていく浮浪者。勘太郎、嬉しさのあまりとび跳ねて去っていく。

#### 4 尋常小学校（昼）

尋常小学校の教室。昼休み時間。皆がそれぞれ弁当を取り出し、昼食を楽しんでいる。そんな中、勘太郎だけが机に突っ伏している。

勘太郎「うう……腹減った」

文子「かんちゃん、お昼ごはんどうしたん？」

勘太郎「……忘れた」

文子「えええ！？ 何やってんのもう」

親七「ぎゃーっはっは！！」

そんなやり取りをしている中、親七と

意地が現れる。(いかにもいいわるそ

うなBGM付き)

意地「ててなし子(父無し子)は大変やなあ。

昼飯もないんかよ」

勘太郎「うるせえ」

親七「僕はやさしいからな。お前に弁当分け  
たるわ」

親七が懐から取り出した豪勢な弁当を  
開ける。あまりに神々しい光を放つ弁  
当。

文子「う、まぶしい！」

親七、箸でおかずをひとつまみ。勘太  
郎の口元に近づける。勘太郎、生唾を  
飲み…口を開ける…。

親七「残念でしたー！」

親七、おかずを床にたたきつける。

意地「ぎゃはは！ 欲しけりや床をなめてみ  
ろや！」

文子「ちょ、ちょっと！」

勘太郎、怒りの形相で親七をにらみ…、

勘太郎 「てめえら…」

意地 「なんや」

勘太郎 「飯を…粗末にすんじゃねえ！！！」

勘太郎、親七と意地につかみかかる。

周りの学生たちもその様子を笑いながら見る。

学生1 「お、喧嘩や喧嘩！」

学生2 「やれやれ、勘太郎ぶっとばせ！」

文子 「みんな止めてよ！」

そこに金八先正（30）がやってきて  
止めに入る。

金八 「またお前らか！ 何をやっ取るんや！」

金八と親七と意地と勘太郎がもみ合いに。

金八 「やめろ、やめろ！ やめろって！」

勘太郎 「邪魔やどけー！ー！」

金八が仲裁に入ったことで、何とか喧嘩が鎮まる。なぜか金八の服がびりびりに破けているが、特にツツコミがあ

るわけでもなく、会話は進行。

親七 「はあ：はあ：こうなったら勝負や」

勘太郎 「なんやと？」

親七 「料理勝負や。お前の作る飯と僕の作る

飯、どっちがうまいか勝負するんや」

勘太郎 「なんやそれ、勝ったらどうなるね

ん」

親七 「負けた方が勝った方に下穿き一丁で土

下座や」

文子 「ええっ」

文子、顔を真っ赤にする。

意地 「なんや自信ないんか？ 定食屋の息子

なんやから、こんな余裕やろ？」

親七 「おい、まちごうとるで。“まずい”定

食屋の息子や」

意地 「ぎゃはは」

勘太郎 「上等やないか！ その勝負のったら

あ！」

文子 「かんちゃん！？」

親七 「よっしゃ。勝負は一週間後。裏山の広



場や。首あらって待っとれや」

親七と意地、出ていく。

勘太郎「こうしちやおれん！　いくぞ文子！

準備や！」

文子「えっえええー！　ちよっと待ってよか  
んちゃん！」

勘太郎と文子、出ていく。

学生1「おいおい、おもしろいことになってきた  
やん！」

学生2「号外つくらな！」

学生3「私も宣伝してくるわ！」

みんな一斉に教室を出ていき、金八だ  
けが残る。

金八「このあと授業あるんやけど…」

## 5 裏山の広場（昼）

人がなだれ込むように現れて場転。

「勘太郎対親七！　料理対決」という  
垂れ幕が中央奥にかかる。舞台つらに

客席ができ、モブ数人と祥子・増田・

野江・金八が座る。

増田 「えらい人やなあ」

野江 「大阪人はみんな祭りが好きやからな、

しかし：うー、寒！」

増田 「冬場やから冷えるなあ」

野江 「酒飲めばあったまるやろ」

野江、片手で酒瓶をあおる。

金八 「俺の授業、面白くないのかな……」

野江 「泣くな先生。ほら、飲め飲め」

増田 「祥子さんも緊張してるんちゃうか？

息子の晴れ舞台やからなあ」

祥子 「勘太郎……！ あんた食堂の息子

なんやから絶対勝てや……！」

増田 「そんなことなかったなあ」

下手から勘太郎と文子が緊張した面持

ちで入ってくる。

勘太郎 「なんでこんなことなっとなねん……」

文子 「なあ勘ちゃん、うちでよかったん？

いくら助っ人に誰連れてきてもいいって話

でも」

勘太郎 「幼馴染のお前が一番信頼できるんや！ 協力してくれ！」

文子 「ま、まあ。いやじゃないんやけどね」

増田 「青春やなあ」

と、そこへ意地が現れる。

意地 「さあさあ皆さん！ ついにお待ちか

ね！ 我らが親七光と、そこに盾突く愚か

者、春川勘太郎の料理対決が始まりま

す！」

親七 「ぎゃーっはっは」

親七が下品な笑い声を響かせ、上手から登場。

親七 「よう逃げずにきたな。褒めたるわ」

勘太郎 「当たり前や！ お前一人か？」

親七 「んなわけないやろ！ 僕の助っ人はこいつや！」

親七の後ろから調理服を着た巨漢、豪

田（32）が現れる。

文子 「なんかすごそう」

親七 「豪田はなあ、親七家のお抱えシェフ  
や！ フランスの名店エトワールで10年  
修行してきた男なんやで！」

勘太郎 「な、なんやて！」

豪田 「どうも、ボンジュール」

親七 「そこでついた異名は：アルデンテの貴  
公子！」

野江 「アルデンテの！」

金八・祥子 「貴公子！？」

増田 「もっといい異名なかったんか」

勘太郎 「おい！ そんなんずるいぞ！ プロ  
やんか！」

親七 「助っ人にプロを連れてきたらあかな  
んて誰も言ってへんで！ なあ司会の意  
地さん！」

意地 「なんも問題ありません！」

文子 「どうしようかんちゃん」

勘太郎 「怖気づくな文子！ やるしかな  
い！」

意地 「さあ盛り上がってきたところで、さっ

そくはじめるで！ 料理対決：開始や！」  
どこからか巨大な銅鑼の音が鳴る。

勘太郎、

勘太郎 「よし、文子。まずは魚屋のおっちゃんからもらったこの鮭を捌いて：」

意地 「おーーっ！ 親七君陣営が取り出したのは巨大な霜降り肉だー！ー！」

文子 「えっ」

勘太郎 「牛肉やと！？」

黙々と調理する豪田。親七、後ろでふんぞりかえって座り、ワイングラスを片手に解説を始める。

親七 「この肉は三重から取り寄せた伊勢牛いうてな、お前みたいなの貧乏人じゃ一生見ることまできん代物や」

意地 「これを今からどうするんですか？」

豪田 「ビフテキにします」

場内がどよめく。

金八 「うわああ！ ビフテキかー！」

野江 「レストランでしかないやろそんなん！

タダで食っていいんか！」

肉を焼く音が聞こえはじめ、観客は思  
わず生唾を飲む。

増田「こりゃあ、きついな」

祥子「勘太郎……」

勘太郎と文子、立ち尽くす。

勘太郎「祥子、とりあえずこれ洗ってくれ」

勘太郎、竹籠からジャガイモを取り出  
す。

意地「勘太郎くん、これは？」

勘太郎「八百屋のおっちゃんからタダでもら

った：売れ残りのクズイモや」

間。

親七「ぶっ」

勘太郎「文子、ごめん」

文子「え」

勘太郎「こんなん勝てるはずなかったんや、

貧乏人の俺がみんなを満足させる飯を作る

なんて……」

白川の声「それは聞き捨てならないな」

調理服に身をつつんだ白川月日（4

1）が現れる。

親七 「誰や！？」

白川 「勘太郎、腹を空かしてる客が前にいるんだ。厨房に立ったなら最後まで作り上げろ」

勘太郎 「誰やねん、あんた……。俺」

意地 「おいおい、なんやねんあんた」

白川 「助っ人は一人までっていう決まりでも

あつたか？」

意地 「う……」

親七 「ええよええよ、有象無象が何人集まろうが一緒や。お、こっちはもうできたみたいやで」

豪田が黙って観客に配膳を進めていく。

豪田 「特選伊勢牛のビフテキでございます」

金八、野江が皿に盛られたビフテキを

食べてうなる。

金八 「うめえ！ 牛肉なんて俺いつ以来かな

あ」

増田 「まさかこんなところでビフテキが食べられるなんてなあ…、うつまま！」

野江 「…」

祥子 「野江さん…」

感動する増田と金八。だが、野江は部フテキを前にしてやや困った顔。勘太郎、その姿を神妙な顔つきで見る。

白川 「気にするな」

勘太郎 「え」

白川 「厨房に入れば勝負なんて関係ない。俺たちはただうまい料理を作るだけだ」

勘太郎 「…おう」

白川 「いい返事だ。さて、あるのはじゃがいもに大根…豚肉か」

勘太郎 「豚汁を作ろうと思ったんや」

白川 「ほう、そりゃあまたなんで」

勘太郎 「今日は寒い日やから、みんなあったまっってほしいなと思って…」



白川、にかつと笑い、勘太郎の背中をたたく。

勘太郎「いたっ！ 何すんねん！」

白川「勘太郎。お前はな、それでいいんだ」

勘太郎「え？」

白川、厨房に立つ。

白川「そうと決まればさっさと仕上げないと  
な。野菜は俺に任せろ」

勘太郎「あ、おい！ 勝手に」

白川、調理場に立ち、包丁ケースからペティナイフを取り出す。白川が取り出したペティナイフがにぶく光る。

勘太郎「なんやそれ、小さい包丁やな」

白川「ペティナイフっていつてな。野菜の下処理に向いた包丁なんだ」

白川、鮮やかな手つきで大根をセットし、輪切りにしていく。トントントン、と鮮やかな音が調理場に響く。

勘太郎「すげえ…」

親七「あいつ何者や…」

白川 「勘太郎、ぼさっとするな。お前がいま  
ここのシェフなんだぞ！」

勘太郎 「お、おう！」

勘太郎、慌てて文子と一緒に鍋の支度を進める。ここからBGMとともに料理の準備が進められる（サイレント）  
そして…、

勘太郎 「完成や！」

観客の前に豚汁が配膳されていく。

意地 「ビフテキを食べた後にこれはまた質素  
ですなあ」

親七 「ま、一瞬焦ったけど、俺たちの勝ちで  
決まりやろ。な、豪田」

豪田 「…：…：そうですか？」

親七 「え？」

増田と金八が配膳された豚汁に口をつ  
ける。

金八 「…うまい！」

増田 「今日は冷えてたからのお。このあった  
かさが身に染みるわ！」

祥子が箸で野菜を取り出す。

祥子「このじゃがいも、変わった切り方やねえ」

親七「なんやあれ」

豪田「あれはシャトー切りといいましてな。

フランス料理でよく使われるシチュー用の野菜の切り方です。豚汁で用いるとは驚きですが……」

親七「そんなん知ってるなんて、あいつ何者なんや」

野江「あれ、でも俺だけ野菜の形が違う？」

勘太郎「野江さん、あんた歯が弱いやろ。あんただけ特別に細かく切ってもろた」

野江「ははは、すまんなあ。かんちゃん」

野江、野菜を口に入れて満足顔。

意地「さて、両陣営の試食は終わりましたね。

審査は観客による挙手制となります！  
では：親七陣営の伊勢牛のビフテキの方がおいしいかっただと思う人：手を挙げてくださ  
い！」

観客、誰も手を挙げない。

勘太郎「え…」

親七「な、なんやと!？」

意地「え：いや、みなさん。聞こえてまし

た？ 伊勢牛のビフテキですよ？」

増田「わかつとる、わかつとる」

意地「じゃ、じゃあ勘太郎の豚汁の方がおい

しかったと思う人！」

観客がみんな手を挙げる。

勘太郎「うそやろ！」

文子「やった！ やったよ！ かんちや

ん！」

白川、満足気に勘太郎の頭をなでる。

白川「やったな」

勘太郎「おっちゃん：ありがとう」

親七「待てえ！ こんなん納得でけへん

ぞ！」

意地「そうやそうや！」

親七「伊勢牛やぞ!? 伊勢牛のビフテキが

そこらのクズ野菜を使った豚汁に負けるは

ずがないやろが！ 勘太郎、お前八百長しよったな！！」

親七が勘太郎に詰め寄り、胸倉をつかむ。

勘太郎「なんやと！ てめえふざけんな！俺はズルなんてしてへん」

親七「うるせえええ！」

親七が勘太郎に殴りかかろうとする。が、その拳を豪田が止める。

親七「豪田！？」

豪田「…ぼっちゃんの非礼をお詫びします。ぼっちゃん、この勝負は我々の負けです」

白川「どうやら、そちらのシェフは敗北の原因がおわかりのようだ」

豪田「ええ。食べるお客様のを：我々は想像していません。なんとも初歩的な誤りですな。お恥ずかしい」

親七「どういうことや」

白川「勘太郎は冷えたこの季節に客が食べたものは何かということを考え、豚汁を選

扱した。そして客の一人一人の好みに合わせて野菜の切り方まで指示してくれたよ」

野江「かんちゃん、ありがとうなあ。食べやすかったで」

勘太郎「おう」

その様子を見ていた祥子が涙ぐむ。

豪田「対して我々はただ庶民に手の届かない料理を相手に叩きつけることしか考えておりませんでしたな」

親七「う…」

豪田「そしてそちらの助っ人の、なんとも繊細な包丁さばき。我々が負けたのは厳然たる事実です」

静まり返る客。そして祥子がばちばちと静かに拍手を送る。そして隣にいた野江も続けて拍手。その波は全体に届いていく。やがて、豪田や意地も。最後に親七も渋々ながら拍手を送る。

勘太郎「みんな…」

白川「勘太郎、お前の勝ちだ」

勘太郎「おっちゃん、あんた何者なんや」

豪田「私は最初から気づいていましたよ。大  
帝国ホテルの総料理長を10年以上務めた  
伝説の料理人：白川月日」

勘太郎「ええっ」

場内がどよめきに包まれる。

白川「おー、俺の名前もそこまで知れわたっ  
てるとはね」

豪田「フランス料理を志すものなら知ってい  
て当然です」

勘太郎「いや、なんでそんな人があんなきつ  
たねえ姿が倒れてたんや！」

白川「ああ、それはなあ」

辰巳「料理長！ー！ー！！」

辰巳和彦（22）が駆け出してくる。

白川「おお、辰巳。お前なんでこんな所に」

辰巳「それはこっちの台詞ですよ！　いつ  
も勝手に放浪されて：、探すのは下っ端の  
私なんですから！」

白川「仕方ないだろ。たまにはこうやって腹

空かした客の気持ちになって、初心に帰らないとな」

勘太郎「ええ！？」

文子「そんな理由で…」

辰巳「いいから行きますよ！ 皆さんお騒がせしました！」

白川「いてて！ わかった！ 引っ張るなつて！」

白川、辰巳に無理やり引っ張られる。勘

太郎「おっちゃん！」

白川「そうだ、勘太郎！ 餞別だ！」

白川、鞆から本を勘太郎にぶん投げる。

受け取る勘太郎。

勘太郎「なんやこれ！」

白川「それを読んで、興味がでたらな！ 東

京に來い！ お前はいい料理人になるぞ！」

白川、去っていく。

勘太郎「なんやったんや」

勘太郎、手元の本に目を落とす…、暗



転。

## 6 春川家の寝室（夜）

春川家の寝室。舞台中央に机がおかれ、勘太郎が白川からもらった本を読んでいる。本の表紙には「西洋料理白書」と刻まれている。勘太郎がページを開く。白川の幻が上手から現れる。

白川「誤解を恐れずに言おう。まだまだ日本の料理文化は発展途上だ。私の上に行く数多くの先人が西洋料理を研鑽し、日本に持ち込んできた。だが、残念ながら日本における料理人の地位は低く、まだ諸外国との差は大きいと感じている」

勘太郎、ページをめくる。

白川「私もその先人の想いに敬意を表し、後続かんと、ここに私の見た西洋料理の一端を書き記そうと思う」

勘太郎、ページをめくる。

白川「私がフランスに渡り、最初に働いた場

所は小さなビストロだった。その看板料理は鴨のコンフィと呼ばれるものだ」

勘太郎「コンフィ？」

白川の説明に合わせて、油でもも肉を煮る音が鳴る。

白川「コンフィとはオイル煮という意味がある。単純に焼くと固くなる鴨のもも肉も、油で煮るとコラーゲンがゼラチン化して、ぐっとやわらかくなるんだ」

勘太郎「油で煮る：！？ 揚げるとかとちやうんか」

勘太郎、ページを読み進める。

白川「私はその後、リック・ホテルに渡り、グリヤーダンの任についた。フランス料理では調理作業を複数の部門に分割し、専門シェフが責任を持って作業をする」

勘太郎「なんやしっかりしとるなあ」

白川「グリヤーダンは肉料理、直火焼きを担当する部門だ。そこで最も作ったのは鹿肉のローストだろう」

勘太郎 「鹿！？」

白川 「おいおい、フランスでは鹿の食肉は当たり前なんだぞ」

勘太郎 「とうとう話しかけてきよった」

白川 「鹿肉は扱いにくく、慣れるのに苦労した。鹿肉を焼くコツはまず常温に戻すこと。芯が冷えたままだと内部と表面で焼きムラができてしまう。そして、低温で長めに焼くこと。高温で焼くと酸化アラキドン酸の臭いが強く出てしまう」

勘太郎 「酸化アラキドン酸：知らんことばかりやな」

勘太郎、布団から飛び出し、上手のキッチンで料理を作り出す。

勘太郎 「必要なのは、鶏肉と油か…」

祥子の声 「勘太郎」

勘太郎 「で、鶏肉は塩を漬けて…」

祥子の声 「勘太郎！」

照明がつく。

照明がつくと、野江と増田が客席に座っている。厨房で作業をする勘太郎。

祥子は客席側から勘太郎を呼ぶ恰好。

祥子「勘太郎、あんた何をしてんの！ 焼き

鳥定食の注文聞いてたん！？」

勘太郎「はいよ、お待ち！」

勘太郎、厨房から出て、皿をカウンタ

ーに出す。その皿を見て固まる野江、

増田、祥子。

間。

祥子「あんた、これなんや」

勘太郎「鶏むね肉のコンフィヤ」

増田「コン、なんやって」

勘太郎「コンフィヤ！ ええから食うてく

れ！ まずかったら金は俺が払うから」

祥子「何を勝手なこというてんの！ 野江さ

ん、ごめんな。すぐ別の出すから」

野江「いや、ええよ。ええ。かんちゃんがそ

こまでいうなら食うたろうやないか」

野江、一口食べる。

野江 「これは：うまいなあ」

祥子 「えっ」

野江 「いや、驚いた。むね肉やのにパサパサ  
しとらん。見た目は焼き鳥みたいやのに肉  
汁があふれて、しっとりしてて：こんな  
初めてや」

増田 「ほう！ かんちゃんもこんな洒落た

料理作るようになったんやな」

勘太郎 「ああ。白川さんに会って：本を読ん  
で俺はわかった。俺は何も知らなかった。  
もっと、料理の勉強をして、一流の料理人  
になるで俺は！」

野江 「ははは、こら将来有望やなあ。なあ祥  
子さん」

野江、祥子の方を見る。祥子、黙った  
まま。

増田 「野江さん、あかん空気やでこれ」

野江 「しまったな」

祥子 「勘太郎、なんで焼き鳥定食を出さなか

ったんや」

勘太郎「別にええやないか、うまいいうてるんやから」

祥子「そんなこと言ってるんとちゃう！この店の料理はな、慎太郎さんが守ってきた味なんや！勝手に変な料理に変えるな！」

勘太郎「何が守ってきた味や！こんなちっぽけな店の何を守る必要があるねん！料理の世界はな、オカンが思ってるよりずっと広いんや！こんな古臭い味続けてたらそのうちつぶれてまうぞ！」

祥子「なんやと！」

祥子、勘太郎に掴みかかろうとする。

慌てて止める野江と増田。

野江「祥子さん、落ち着いて！」

増田「かんちゃんも言い過ぎやぞ！」

勘太郎「この店におつたら、俺は一流の料理人になられへん！オカンが考え変えへんのやったら、俺は出ていくぞ！」

間。

祥子「何が一流の料理人や。しょうもない」

勘太郎「オカン……！」

祥子「あんたがその気なんやったら、もう好きにしたらええわ。どこにでも言っただけにしたらええ！ 勘当や」

野江「ちよっと、祥子さん！」

勘太郎「言われんでもでてったるわ！ じゃ

あな！ 世話なったわ」

勘太郎、店を出ていく。祥子、息をつくようにして座り込む。

野江「祥子さん、ええんか！？」

増田「かんちゃん、ほんまに出ていってまうぞ！？」

祥子「……今日はもう店仕舞いや。ごめんな、

野江さん、増田さん」

野江「祥子さん……」

暗転。

明転。大荷物を背負った勘太郎が現れる。

文子の声「かんちゃん！！！！」

文子がやってくる。

勘太郎「文子：どうしたんや、こんな時間  
に」

文子「祥子さんから聞いたよ。東京いくって

ほんま：？」

勘太郎「ああ」

文子「なんで！　なんでなん！　なんでここ  
やったらあかんの！」

勘太郎「俺は立派な料理人になる。本気で修  
行したいんや。：文子。幼馴染のお前にし  
か頼めんことがある」

文子「え」

勘太郎「オカンを：守ってほしい。オカン、  
1人になってまうから」

文子「うん、わかった」

勘太郎「ごめんな」

文子「かんちゃん、うちな：うち：」



間。

勘太郎「どうした？」

文子「：うち、かんちゃんのこと：」

親七・意地「かんたるおおおおおお！！」

親七と意地が現れる。二人とも下履き

姿である。

文子「きゃああああ！！」

勘太郎「うお！ お前ら、なんやその格

好！」

親七「親七財閥の家訓はな、金と約束は守れ、

や！ 吐いた唾は飲まんぞ！ 下履きで土

下座したる！！」

意地「せーの！！！」

親七と意地、勢いよく勘太郎に土下

座。

親七・意地「すんませんでした！！！」

間。勘太郎と文子、つい吹き出し、笑

ってしまう。

意地「何を笑つとるんや！！！」

勘太郎「お前ら：アホやなあ」

親七 「おい、勘太郎。お前東京行って料理人なるらしいな」

勘太郎 「まあな」

親七 「絶対なれよ！」

勘太郎 「え」

親七 「お前はこの親七財閥の御曹司を土下座までさせた男や！ 途中であきらめやがったらどつきまわすぞ！！！」

意地 「そうと決まったら万歳三唱や！ おら

文子も！」

文子 「え！ 私も！？」

汽車の音が鳴り、勘太郎が乗り込んでいく。

親七・意地・文子 「ばんざーい！！ ばんざ

ーい！！ ばんざーい！！」

勘太郎 「じゃあな！！ みんな！」

汽車が発車する音が鳴り　：親七と意地と文子が出ていく。一人になった勘太郎。静けさの中で佇む。

暗転。

「1935年4月」の文字が舞台上に  
浮かぶ。舞台中央に立つ勘太郎。

勘太郎 「ここが開明館：：でっけえ建物やな  
あ」

山尾益男（15）が入ってきて、勘太  
郎にぶつかると。勘太郎の鞆から荷物が  
飛び出す。

勘太郎 「いったあ。何すんねん！」

山尾、勘太郎をちらりと見るが、黙っ  
て去る。勘太郎、散乱した荷物を拾っ  
ていると、伊勢崎正平（37）が現れ、  
勘太郎に荷物を渡す。

伊勢崎 「君は開明館に来た新人かな？」

勘太郎 「あ、はい」

伊勢崎 「やっぱり。私は伊勢崎グループの伊  
勢崎正平という者だね」

勘太郎 「え、めっちゃ偉いさん：」

伊勢崎 「いやいや、そうかしこまらなくて  
い。個人的に飲食事業には興味があつて

ね。よく巷のレストランを視察しているんだ。ここも素晴らしい店だ」

勘太郎「は、はい」

伊勢崎「君のような若者が日本のフレンチを盛り上げてくれると客の私も嬉しい。頑張ってくれ」

伊勢崎、にこりと笑って勘太郎と握手する。

勘太郎「は、はい！」

伊勢崎、笑って去っていく。

勘太郎「ええ人もいるんやなあ」

## 9 開明館・厨房（昼）

場転。

辰巳「新人！ー！ー！ 整列！！」

辰巳が現れ、勘太郎と山尾が前で整列する。

勘太郎「あ、お前も新人やったんか」

山尾、黙ったまま。

勘太郎「無視かい」

辰巳「私語はやめろ！ 料理長が来るぞ！」

白川が現れる。勘太郎に目配せし、微笑む。

勘太郎「あ…」

白川「総料理長の白川だ。諸君らも知っての通り、日本の西洋料理文化はいま、大きな開拓の一途にある。築地の静養軒から始まった大きな開拓の波。これに私も乗らんと、この開明館を開いた。だがまだ理想には遠い。私はいずれ誰もがこのフランス料理を楽しめる…そのような店を築けられればと思っています。諸君らの力をぜひ借りたい。よろしく頼む」

辰巳「礼！」

勘太郎と山尾が頭を深々と下げ、白川が去っていく。代わるように舞台奥から料理人たちが現れ、作業を開始する。

勘太郎「ここが開明館の厨房か！ よっしゃ、俺の包丁さばき見せたるでえ！！」

辰巳「バカ野郎！ いきなり包丁なんて持た

せるか！ お前ら新人は皿洗いだ」

勘太郎「え」

辰巳「どんどん来るからな！ 覚悟してろ！

大城、あとの面倒はお前に任せるぞ」

大城平八郎（20）が現れる。

大城「わかりました、任せてください」

辰巳「頼むぞ」

勘太郎「大城さん！ よろしく！」

勘太郎がそう声をかけると、大城の顔が豹変。勘太郎の帽子を弾き飛ばす。

勘太郎「え」

大城「よろしく、じゃねえよ。よろしくお願  
いします、だろ。てめえ、俺が誰かわかっ  
てんのか？」

勘太郎「す、すみません」

モブ料理人「お願いしまーす」

大量の皿を持ったモブ料理人がやって  
くる。

勘太郎「ええええ」

勘太郎と山尾が必死に皿を洗う。だが、  
どんだん来る。

モブ料理人「おう、これも頼む」

どんだんたままっていく皿。まったく追  
いつかない。

大城「おいおい、どんだんたまってるじゃね  
えかよ」

勘太郎「そんなこといっても皿がすぐに運ば  
れるから」

大城「ああ？」

大城が勘太郎の足を膝カックンする。

勘太郎「うわあ」

勘太郎が皿を落としてしまい、割って  
しまう。

大城「おいおいおいおーい！ 何やってん  
だよお」

辰巳「おい、どうした、大丈夫か！？」

大城「辰巳さん、すみません。こいつ皿の洗  
い方もろくにわかってないみたいなんで、  
俺から教えておきますよ」

辰巳 「すまん、世話をかけるな」

大城 「ウイーシェフ」

大城、急に表情を変えて勘太郎の頭を  
掴む。

大城 「お前なんか勘違いしてるみたいだけど

よお、ここじゃ俺がお前の上司なんだよ。

次なめた態度とったらわかってんだろう

な？」

勘太郎 「：はい」

去っていく大城。勘太郎、立ち上がった皿洗いを再開する。山尾は相変わらず黙って皿洗いをしたまま。

辰巳の声 「終業ー！！ 各自持ち場点検して帰ってよし」

勘太郎 「お、終わった：こんなはずと続くんか：」

勘太郎と山尾が帰ろうとすると、掃除用具を持った大城が現れる。

大城 「おい、お前らは厨房掃除だ。終わるまで帰るなよ」



勘太郎「え」

掃除用具を渡され、渋々と掃除を始める勘太郎。山尾、バケツから雑巾を出し、丁寧に拭く。無言。黙って掃除を続ける二人。

勘太郎「なあ」

山尾が振り返り、「自分？」というジェスチャーを行う。

勘太郎「いや、お前しかおらんやろ！ 名前なんていうんやっけ？」

山尾「∴山尾」

勘太郎「そっか。山尾はなんで誰とも喋らないんや。そんなんやったら、仕事するときに変やで」

山尾、困ったように目を泳がせる。

山尾「したって∴」

勘太郎「ん？」

山尾「おら∴。北海道生まれで言葉がなまらみったくない∴。えっと、みっともないから」

勘太郎、急に笑う。

山尾「なして笑う!？」

勘太郎「そんな理由やったんか、とおもて!

俺も大阪弁やけど気にしたことないわ!」

山尾「勘太郎くんはこっぱずかしくない

の?」

勘太郎「生まれた場所の言葉やろ。何が恥ず

かしいねん。笑うやつおっいたら、ぶん殴る

わ」

山尾「勘太郎くんはすごいなあ」

勘太郎「くん付けはやめえ、それこそ恥ずか

しいわ」

山尾「かんちゃんはすごいなあ」

勘太郎「いや、急に距離が近づいてへん?」

山尾「え、ごめん」

勘太郎、笑いながら

勘太郎「いや、もうええけど。山尾はなん

で開明館に入ったんや」

山尾「おら、家が牧場でさ。小さい時から牛

や鶏を育ててたんだけど、ある日思ったん

だべ。おらたちが育てた牛や鶏をもっとおいしく食べてもらえる方法はないんかなって」

勘太郎「それで料理人に？」

山尾「うん。おらの夢は実家の牧場の中に直営のレストランを作ることだべさ」

勘太郎「牧場にレストランを作るんか！ それは絶対うまいな！」

山尾「その夢のためやったらなんでもする。開明館は噂通りすごいところだったべさ。今日もたくさん勉強できることあったし」

勘太郎「え？ 今日なんか皿洗いしかしてへんやんか。何を勉強することあったんや」

山尾「皿洗い中、横目で先輩たちの手さばきや工程をずっと見てたんだべさ。包丁の入れ方や声のかけ合い方まで。自分がその場に立ったらできないことだらけだったべ。でもだからこそ、見て勉強できるんはすごくありがたいんよ」

勘太郎「山尾、お前：すごいなあ！」

山尾 「え」

勘太郎 「皿洗いなんて面倒で地味やし、偉そうに指示する大城が大嫌いとしか思ってへんかった。そんな風に捉えるなんて」

山尾 「牧場の作業も面倒なことだらけだった。でも、どんな作業にも意味があるんよ」

勘太郎 「うん」

感動し、大きく頷く勘太郎。

山尾 「あ。でもな、かんちゃん」

勘太郎 「え？」

山尾 「大城のことは僕も大嫌いだべさ」

勘太郎と山尾、目を見合わせて爆笑する。

勘太郎 「お互い頑張ろうな」

山尾 「うん！」

山尾と勘太郎、お互い握手。ここで場

転。皿洗いを続ける二人。舞台に映る

「1935年4月」の文字。それが

「1936年4月」へと変化する。

大城 「おい、調子はどうだ。まだトロトロ洗

ってるんじゃー」

勘太郎「終わりました！」

大城「え」

モブ料理人「早いな！ こっちも頼む」

モブ料理人が皿を持ってくる。

勘太郎「はい！ 任せてください！」

モブ料理人「おい、パイ皿が足りない！」

山尾「先に洗っておきました！ どうぞ」

山尾、パイ皿を渡す。

モブ料理人「おっ、よく見てるな！ 助か

る！」

大城「ちっ」

辰巳と白川がやってくる。

辰巳「終業ー！ 春川、山尾。ちょっと来

い」

白川と辰巳の前に、勘太郎と山尾が整

列。後ろには大城。

勘太郎「ウイー！シェフ！」

辰巳「また新人も入ってきたし、お前らもそろそろシェフ・ド・パルティの下について

もいい頃だな。明日から各部門を回って仕事を覚えてもらう」

勘太郎「え！」

山尾「やった！」

大城「ちょ、ちょっと本気ですか！？ こいつらには早すぎますって」

白川「できる下はどんどん育てる。大城、他人の心配をしてる場合か？ お前はいつまで下働きし続けるつもりだ？」

大城「：すみません」

辰巳「大城、お前は残って特訓だ」

大城「ええ！？」

辰巳「おら、こい」

辰巳に無理やり連れられていく大城。

白川「そういえば勘太郎、店に手紙が届いたんだが：どうもお前に宛ててるらしい」

勘太郎「え？ 俺ですか？」

白川「松山文子：お前の彼女か？ 隅におけないな。住所ぐらい教えてやれ」

白川、ニヤニヤしながら勘太郎に手紙

を渡して去る。

山尾 「かんちゃん、彼女いたんだべか…」

勘太郎 「違う違う！」

勘太郎、手紙を開けて読む。その顔が

次第に曇っていく。

山尾 「かんちゃん？」

勘太郎 「オカンが…倒れた」

山尾 「え」

勘太郎 「命に別条はないらしい。ただの過労や  
って…」

山尾 「そっか、それならよかった。…かんちゃん、  
家には戻らんのか」

勘太郎 「俺は…帰らへん」

山尾、勘太郎の返答に息を飲む。手紙を  
握り潰し、葛藤の表情を見せる勘太郎。

勘太郎 「山尾、俺はこわいんや。オカンの顔を  
見て、この熱が消えてまうのがこわい」

山尾 「熱？」

勘太郎 「白川さんに出会って、オカンと喧嘩を  
して、俺はここまで来た。熱に浮かされたみ

たいに。でも：まだどこかでこう思つとる。  
一流の料理人なんてなれないんとちゃうか。  
大阪でオカンと一緒になかよう春川亭やつと  
るほうが幸せやったんちゃうかって。いまオ  
カンの顔を見たら：俺はもう戻つてこれない  
気がする。熱が消えてしまひそうなんや」

山尾 「かんちゃん：」

山尾、勘太郎の背に何か声をかけようと  
するが、あきらめて去る。

勘太郎 「親不幸者や、俺は」

舞台上に映る「1936年4月」の文字。

それが「1936年8月」へと変化す  
る。明転。

白川 「勘太郎：なんだこの皿は？ なめて  
るのか？」

勘太郎 「：すみません」

白川 「グリエの焼き時間が明らかに短い。気  
づいているはずだ。なんでそのまま出し  
た」

勘太郎 「下処理の工程が遅れてたからです。



急がねばと思ひ：つい」

白川、勘太郎の帽子をはたき落とす。

白川「お前にとっては何千皿のうちのたった

一つかもしれない。でもな、客にとって

はこの店で食べるかけがえのない一皿だ。

お前はその機会を奪うところだったんだ。

そのことがわからん奴はな、その帽子を外

して大阪へ帰れ」

勘太郎、すぐさま土下座する。

勘太郎「シェフ！ 申し訳ありません。俺は

こんなところでやめられません！ だから

続けさせてください」

白川「：持ち場へ戻れ」

白川、去る。勘太郎、立ちあがり、

勘太郎「こんなんじゃあかん、こんなんじゃ

あかん、こんなんじゃ」

照明、暗くなり、「1936年8月」

の文字が浮かび上がる。「1936年

10月」へ。勘太郎、包丁を取り出し、

微塵切りのマイムを行いながら

勘太郎 「こんなんじゃあかん」

「1936年10月」から「1936年12月」へ。

勘太郎 「こんなんじゃあかん」

山尾がやってくる。

山尾 「かんちゃん、やりすぎだべ！ ほん

ど寝てないだろ！？」

勘太郎、机を叩く。

勘太郎 「うるっせえ！ 俺は早く一流の料理人にならなあかんねん！ 邪魔すんじゃねえ！」

山尾、悲しい表情を浮かべて去る。

勘太郎 「こんなんじゃあかん」

「1936年12月」の文字が舞台壁に浮かび上がる。「1937年1月」

「1937年2月」…と、一か月ごとにどんどん日付が更新されていく。その間、勘太郎は一人で包丁を扱うマイム。裏から様々な人の声が聞こえてくる。

モブ料理人の声「勘太郎のやつ、シェフ・ド・パーティに昇進だってよ」

モブ料理人の声「嘘だろ？ あいつまだ入って3年とかだろ」

モブ料理人の声「調子に乗りやがって」

勘太郎「こんなんじゃあかん」

モブ料理人の声「上野にできる2号店、勘太郎がスーシェフらしいぞ」

モブ料理人の声「挫折知らずの天才はいいよなあ」

モブ料理人の声「おい、聞こえたらどうするんだよ、大城みたいに追放されるぞ」

モブ料理人の声「くわばらくわばら」

勘太郎「こんなんじゃあかん！！」

「1939年12月」になり、文字の変化が止まる。照明が明るくなる。

10 上野開明館・ホール（昼）

伊勢崎（41）が優雅に食事をしていく。隣に立つ勘太郎（19）。

伊勢崎 「いやあ、今日もすばらしい晩餐だった。最後のデザートも楽しみにしているよ」

勘太郎 「ありがとうございます」

伊勢崎 「若い者も取り立てる白川シェフの慧眼は素晴らしいね。君が上野に来て1年になるが、上野の開明館を食通で知らぬ者はない。精養軒に追いつけ追い越せとあったところか」

勘太郎 「もったいないお言葉です」

伊勢崎 「さて、少し耳を貸したまえ」

勘太郎 「はい」

伊勢崎 「近々銀座にホテルを建てることになってね。政府からも出資を受け、外国人向けの接遇も兼ねている。その厨房を担当する料理人を探しているんだが、君を迎えたい」

勘太郎 「そんな、私はこのスーシェフなんですよ」

伊勢崎 「確かにここは素晴らしい名店だが、

所詮は町のレストランだ。ホテルとなれば  
役人のお偉方も多く来るようになる。君の  
料理人としての箔も付くと思うがね」

勘太郎「…」

伊勢崎「一流の料理人になりたいんだろう」

勘太郎「あ…」

そこに小汚い恰好をした男と女がやっ  
てくる。

小汚い女「あなた、こんな高そうなところ大  
丈夫なの？」

小汚い男「大丈夫大丈夫。今日はな、棟梁か  
ら臨時のお給金もらったんだ。お前の誕生  
日だからな。奮発するぞお」

小汚い女「えーもう！好き！」

伊勢崎「…追い払いたまえ」

勘太郎「え」

伊勢崎「あのような小汚くうるさい連中が近  
くにいるだけで料理の味が落ちる」

勘太郎「いやでも」

伊勢崎「これは試験だ。君が我がホテルの厨

房を担えるかどうかのね」

勘太郎、逡巡する。小汚い男が後ろにやっできて、

小汚い男「あなた店員さんだろう？　ほら席に案内してくれよ」

勘太郎「：お引き取りください」

小汚い女「え」

小汚い男「いまなんて」

勘太郎「あなたたちのような方々は当レストランにはふさわしくありません」

小汚い男「なんで！　ほらお金もあるのに！」

男がポケットからお金を握りしめて取り出す。

勘太郎「お金の問題じゃありません。ここは一流の料理を提供するレストランです。一流のふるまいができる方でなければ：」

白川「どういうことだ勘太郎！」

そこへ白川（46）がやってくる。

勘太郎「白川さん！？」

白川「久々に様子を見に来たらなんてことを！？ お前は客を選べるほど偉くなったつもりか！？」

伊勢崎「勘太郎君の言っていることに何も間違いはないと思うが」

白川、伊勢崎の方を見る。

白川「伊勢崎、またお前か。料理を金としか見ていない男が」

伊勢崎「なんのことだか」

勘太郎「：お言葉ですが、俺はここに来るまで相応の努力をしてきました。食べる客を選ぶ権利くらいあってもええやないですか！」

間。

白川「：お前はいい料理人になると思っていたが、見込み違いだったな」

白川、小汚い男と女を見て、

白川「本店にご案内します。料金は不要です」

白川、小汚い男と女を連れて出ていく。

勘太郎、伊勢崎の方をちらりと見る。

伊勢崎、頷く。

勘太郎「これでええんや：俺は」

照明暗くなる。「1938年3月」の

文字が舞台に浮かび上がる。「194

1年12月」で文字がストップ。

1 1 銀座のホテル・厨房（昼）

モブ料理人「シェフ、テリーヌが完成しました。確認をお願いします」

勘太郎（21）がそれを見てモブ料理人を殴る。

勘太郎「なんやこれは！？ゼラチンが固まりきつとらんやないか！？こんなもんをよう俺のところに出したな！」

勘太郎が皿を投げつける。

勘太郎「やり直してこい！」

モブ料理人「は、はい！」



モブ料理人と入れ替わりで伊勢崎（4  
3）が入ってくる。

伊勢崎 「荒れてるな」

勘太郎 「オーナー…、ここは厨房です。断り  
なく入られては」

伊勢崎 「ああ。ただ、火急の要件でな」

勘太郎 「え？」

伊勢崎 「明日以降、ホテルの営業を停止す  
る」

勘太郎 「…は？」

伊勢崎 「私のところに赤紙がきた。近いうち  
に戦地行きだ。このホテルは軍に徴用され、  
陸海軍の病院施設となる」

勘太郎 「なんやと！？　じゃあ俺たちはどう  
なるんです！？」

伊勢崎 「すまんが、後処理をしている時間  
はない。軍の命令にしたがってくれ」

勘太郎 「おい！　ちょっと待ってくれ！　俺  
はあんたを信じてここまで来たんやぞ！  
そんな勝手な！」

伊勢崎が勘太郎の胸倉を掴む。

伊勢崎「料理で戦争は勝てんぞ」

伊勢崎の圧に勘太郎、押し黙る。

伊勢崎「君も徴兵検査は受けただろう。すぐに赤紙がくる。今のうちに身边を整えておけ」

伊勢崎、去る。照明が赤くなる。

ラジオのアナウンス「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大  
本営陸海軍部、12月8日午前6時発表。  
帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入  
れり」

アナウンスの終了とともに、配達人がやってくる。勘太郎に召集令状を渡す。

配達人「おめでとございます」

配達人が敬礼をし、去っていく。勘太郎、召集令状をながめて、ぽつり。

勘太郎「料理で戦争は勝てない……」

暗転。「1945年3月」の文字が舞台に浮かび上がる。

1 1 戦地（夜）

軍服に身を包んだ男、猪竹勝（38）が舞台中央にいる。

猪竹「行進やめ！ 明日の払暁にて作戦を開始し、今日はここで野営を行う。春川一等兵はおるか！」

軍服に身を包んだ勘太郎（25）が現れる。

勘太郎「は」

猪竹「貴様、料理の覚えがあるらしいな」

勘太郎「∴少しは」

猪竹「長い行軍で兵の空腹が限界にきている。あり合わせのもので何か作れ」

勘太郎「し、しかし材料が」

猪竹「そこらへんの野草でも何でもあるだろう！ 分隊の兵士にも似たような奴がいる。協力して何か作れ！」

勘太郎「は！」

猪竹、去る。勘太郎、溜息をつく。

勘太郎「無茶苦茶やな」

勘太郎、ふと舞台隅を見ると野草を摘んでいる兵士がいる。

勘太郎「あの後ろ姿どこかで……」

勘太郎が恐る恐る近づく。

勘太郎「あの一」

兵士「うわあああ」

兵士、振り返って銃を向ける。

勘太郎「うわあああ」

勘太郎と兵士、固まって顔を見合わせる。兵士の顔はよくみるとあの山尾(25)だった。

勘太郎「うわ！ 山尾やないか！ 生きとつ

たんかわれ！」

兵士改め山尾「かんちゃんこそ久しぶりやな

あ」

二人、互いに抱きしめあう。

勘太郎「何しとつたんや今まで」

山尾 「最初は炊事兵だったんだけど、歩兵中隊に転属になったんよ。かんちゃんも炊事兵やと思ったわ」

勘太郎 「俺は：自分がなんのために料理をしとったんかわからなくなった」

山尾 「え」

勘太郎 「オカンに一流の料理人になるって啖呵きつて、突っ走ってきた。そしてなつた、なれたと思った。でも、戦争の前じゃそんなもん何の意味もなかったんや」

勘太郎、野草を探し出す。

勘太郎 「料理で戦争は勝たれへん。今は国のために戦うだけや」

山尾 「：そうか」

勘太郎 「おっこのキノコとかどうなんやろ」

勘太郎、明らかに禍々しいキノコを拾い、かじる。

山尾 「かんちゃん、それ毒」

勘太郎 「おえええええ」

勘太郎、げろげろと吐く。

山尾 「野草はあらかた摘んだべさ。オオバコ、ヨモギ、ハナビラタケ、その他諸々」

山尾、カゴを見せる。

勘太郎 「さすが田舎出身やな…」

山尾 「でもさすがに野草だけやと空腹は満たせないべさ」

勘太郎 「そこは考えがある。山尾、さっそく水洗いしてくれ」

陽気な音楽とともに二人の料理が始まる。

山尾 「ありったけの野草を綺麗に水洗いして」

勘太郎 「俺はこれをアツシエにするで」

勘太郎、みじん切りのマイムを行う。

山尾 「南京豆を絞った油があるべさ」

勘太郎 「お、さすが。これを鍋にひたひたに入れて…炒める」

勘太郎、鍋で野草を炒めるマイムを行う。

山尾 「で、ここからどうするんだべさ」

勘太郎 「基地からこっそりくすねてきたカレー粉」

パンパカッパンパーン！

山尾 「ちゃっかりしてるべさ」

勘太郎 「死ぬ前に食べようと思ってたんや。

カレー粉を入れて、炒め続ける」

モブ軍人1とモブ軍人2が様子を見に来る。

モブ軍人1 「おい、カレーの匂いがするぞ」

モブ軍人2 「こんなところでカレーが食べられるはずが…ほんまや」

モブ軍人3とモブ軍人4も現れる。

モブ軍人3 「カレー！？ カレーだと！？」

モブ軍人4 「おい、俺にも食べさせろ！」

勘太郎 「おいおい、落ち着けて！ まだ完成してへん！！」

猪竹 「貴様らーーーー！！ なーにをしとるかあ！！！」

怒り狂った猪竹がモブ軍人をかき分けて勘太郎たちの前に出てくる。

猪竹「こんな最前線で匂いのきついカレーを作るやつがあるか！？ 制裁じゃあ！！  
歯を食いしばれええ」

猪竹の怒りの鉄拳が勘太郎を襲う！！

山尾「まあまあ」

と思いきや山尾がスプーンでカレーを

猪竹の口に運ぶ。間。黙って咀嚼する

猪竹。

猪竹「……うまい」

ワツと湧く一同。

勘太郎「よっしゃ、みんなできたで！！ 並

べ並べー！！！！」

モブ軍人に皿を渡していく勘太郎と山尾。

猪竹「この匂いは早く消してしまわねばならん！！ ここはワシが先導する！！ 大盛で頼むぞ！！！！」

モブ軍人 1・2・3・4 「えー！！！！」



モブ軍人たちと猪竹が無心でカレーを食べる。それをぼーっと見つめる勘太郎と山尾。

勘太郎 「なんか…」

山尾 「え」

勘太郎 「久々に人が飯食ってる顔を見た気がする」

山尾、クスクスと笑う。

モブ軍人1 「うめえ…うめえよお」

モブ軍人2 「恋人に作ってもらったカレーを  
思い出す…こんなもう食べられへんか  
と」

猪竹 「おかわりをいただくぞ！！！！」

勘太郎 「なんか色々忘れとったんかな…俺」

山尾 「こんな大変な時だからこそさ…僕ら  
みたいな料理人が必要だと思っただべ」

勘太郎 「山尾…」

山尾 「腹が満たされない世の中だからこそ…  
誰かの腹を満たす…そんな僕たちのような  
存在が」

勘太郎「：そうなんかな」

カレーを食べ続ける山尾と勘太郎。照明が赤くなる。銃声と怒号の音がフェードインで流れ始めてくる。そしてとてもない衝撃音。全員が吹き飛ぶ。立ち上がり、前線で銃撃を始める勘太郎。そこに猪竹がやってくる。

勘太郎「猪竹中尉！！」

猪竹「前線はほぼ壊滅のようだな。春川一等兵、いつぞやか食べた貴様のカレー、うまかったぞ」

猪竹、軍服を脱ぐ。上半身には大量の手りゅう弾が括り付けられている。

猪竹「これより突貫する！！ 大日本帝国ばんざーい！！！！」

猪竹が突撃する。鳴りやまぬ銃声、そして爆発音。銃撃がやむ。勘太郎が塹壕で様子をうかがっていると山尾が現れる。

勘太郎「山尾、生きとったか」

山尾 「銃声はやんだべか」

勘太郎 「中尉が道を切り開いた。俺もこれから突貫する」

先に進もうとする勘太郎の手を山尾が掴む。

山尾 「かんちゃん、もうやめるべ。わかっとなるだろ：この戦争は負ける」

勘太郎 「何をいっとるんや！！」

山尾 「でもな、ここからだべ。俺たちの戦いは」

勘太郎 「どういうことや」

山尾 「俺は：実家の牧場でレストランを開く。それでお腹を空かせた人にたくさん肉を食べてもらおう」

勘太郎 「そんなこというてたな」

山尾 「かんちゃんはどうする」

勘太郎、涙がでてくる。

勘太郎 「俺：俺は：どうしたらええんやろうな：」

山尾 「かんちゃん、僕はな。かんちゃんはもう一流の料理人やと思う」

勘太郎 「はあ？ 何を言ってる」

山尾 「かんちゃん、かんちゃんの思う一流の料理人って：なんや」

勘太郎 「え：」

山尾 「大丈夫、大丈夫だべ」

銃声が鳴る。間。山尾、全身から力が抜け、だらりと倒れる。

勘太郎 「：あ？ あああ、ああああああああああああ！！！！」

勘太郎、獣のように吼える。そこに響く爆撃音。勘太郎、倒れる。

間。暗闇の中で勘太郎が起き上がる。

勘太郎 「どこや、ここ」  
祥子の姿が勘太郎の前に浮かびあがる。

勘太郎 「オカン！」

祥子の返事はない。勘太郎、すがりつくように話し続ける。

勘太郎 「オカン、ごめん！俺が悪かった！

客も店もバカにするようなこと行って！

一流の料理人なんてどうでもええ！俺は、

オカンと一緒に料理作って、客を腹いっば

いにできればそれでええ！！」

祥子、去っていく。

勘太郎 「行くな！行かんといってくれ！オ

カン！」

## 1 2 病院（昼）

照明、明るくなる。勘太郎の手の先に

は看護師の女性。

看護師 「うわ、びっくりした！起きた！

起きたのね！」

勘太郎の顔をあげて瞳孔の確認。

勘太郎 「いてて。え、ここは？」

看護師 「自分の名前わかりますかー？あと

年齢と出身地」

勘太郎 「春川勘太郎。24歳。出身は：大

阪」

大阪の単語を聞いた瞬間、神妙な顔つきになる看護師。

勘太郎「え、何か」

看護師「：なんでもありません。先生を呼んできます」

勘太郎「いや、なんかあるでしょ！　今の！　ねえ！」

看護師、立ち止まり：振り返る。

看護師「起きて早々辛いけど：すぐにわかると思うから」

空襲警報のサイレンがインサートされる。

ラジオのアナウンス「中部軍管区情報。中部軍管区情報。3月13日午後11時57分。大阪湾より敵機が潜入せり。我が方もこれを迎え撃つ」

暗転。「1945年3月」の文字が浮かび上がる。

明転。空襲警報のサイレンが鳴り響く  
中、必死に逃げる文子（25）と祥子  
（44）。ぴかっという光の音と共に、  
文子と祥子が倒れる。倒れる文子を見  
る祥子。

文子「祥子さん！！」

祥子「足が挟まって：文子さんあんただけで  
も行って」

文子、祥子の足の上に載った瓦礫をど  
かそうとする。だが、びくともしない。

文子「嫌や！嫌や！こんな瓦礫、腕がも  
げてもどかします！！」

祥子「文子さんあかんて！火が来る！！」

文子「かんちゃんに託されたんです！守っ  
てって！だからこんな所じゃ」

祥子「文子さん、ありがとう。ありがとうね。  
あんたがいたから今までやってこれた。う  
十分よ」

祥子、頭の手ぬぐいを外し、文子に渡  
そうとする。それを受け取る文子。

文子「祥子さん！」

祥子「勘太郎をお願い：！ あんたまでいなくなったらあの子はもう：」

火の手が迫る。文子、泣きながら去っていく。

祥子「慎太郎さん、ごめんなあ：」

轟音が鳴り響く。

祥子「勘太郎：」

暗転。

#### 14 東京・繁華街（夜）

「1948年2月」の文字が映し出され、明転する。酔っ払いの男と女が歩いていく。

酔っ払いの男「赤いリンゴに」

酔っ払いの女「唇よくせうてう」

ゲラゲラと笑う男と女。そこにふらふらとやってくる勘太郎（28）。勘太郎、酔っ払いの男にぶつかる。

酔っ払いの男「ああ、いってえなコラ」



勘太郎、どんよりとした目で酔っ払いの男を見る。

酔っ払いの女「きつたない男ねえ」

酔っ払いの男「おらよ！」

殴り飛ばされる勘太郎。勘太郎、倒れ  
たままピクリとも動かない。

酔っ払いの男「あれ、死んじゃった？」

酔っ払いの女「バカね、そんなわけないじゃないの」

酔っ払いの男と女が勘太郎の服をまさぐる。

酔っ払いの男「何もないじゃねえかよ」

老紳士「おい」

老紳士が現れる。帽子を目深にかぶり、  
右手で杖をついている。左腕側の袖か  
ら腕は見えない。

酔っ払いの男「なんだコラ」

威勢よく向かう男に杖を突きつける 老  
紳士。

老紳士「お前らが欲しいのはこれだろ。うま

いものでも食って失せろ」

老紳士、地面に金をばらまく。目の色を変えて飛びつく酔っ払いの男と女。そのまま去っていく。老紳士と勘太郎が二人。間。ぐーとお腹の音が鳴る。

勘太郎「こんなときでも：腹は減るんやな」  
老紳士、杖をつきながら黙って勘太郎の前に立ち、腹をつつく。

勘太郎「いてっ、ちょ、ちょっと！！」  
老紳士、懐からハンバーガーを取り出す。

勘太郎「え：」  
老紳士「あの時とは逆になったな、勘太郎」

老紳士、帽子を外す。老紳士の正体は白川（55）だった。

勘太郎「：白川さん！？」

老紳士改め白川「探したぞ、勘太郎」

白川からハンバーガーを受け取る勘太郎。

勘太郎「急すぎて何を話したらいいか」

お腹の音が鳴る。

白川「積もる話は後だ。まずはそれを食べ」

勘太郎「なんなんや、これ」

包みを開ける勘太郎。

白川「ハンバーガーというそうだ。捕虜の米

兵から向こうの料理について聞いていたら、

教えてもらってな」

勘太郎「アメ公の飯かよ」

白川「まあ、そう言うな。これは実によくできてる」

白川、懐からまたハンバーガーを取り出す。

白川「パンに肉や野菜を挟む。単純だが何層も重ねることで応用もしやすい。サンドウイッチと違って高さもあるが、その分腹も膨れやすい」

白川「そしてなにより：片手でも食べられる」

勘太郎「白川さん：その右手、やっぱり」

白川「俺は砲兵中隊だったんだが、爆片が腕

中に刺さりまくってな。切断するしかなか  
った。ま、生きてるだけ儲けもんだ」

勘太郎「今は何をしてるんですか」

白川「これじゃうまく料理もできないし、開  
明館もつぶれた。今はやりたいことを探し  
て旅をしてる。人助けもしつつな」

勘太郎「人助け？」

白川「ある人に頼まれてな。お前をずっと探  
していた。お前、大阪に帰ってないんだろ  
う」

勘太郎「…はい」

白川「料理人に戻る気はないのか」

勘太郎「俺にその資格はありません。親を捨  
てて好き勝手に、謝ることもできず死に  
目にも会えんかった…。そんな俺がどの面  
下げて料理人に戻るっていうんですか」

白川「勘太郎…」

勘太郎「白川さんも俺のことは放っておいて  
ください。俺は死人です。もう料理なん

て…」

白川「はー！ー！ー！ー！！！！！！」

白川、杖で勘太郎をぶん殴る。

勘太郎「いってええー！ー！ー！ー！！」

白川「ごちゃごちゃうるさいぞ！！ お前に

後を託した人、待っている人、全員にそれ

を言うつもりか！！」

勘太郎「な、なにを」

起き上がる勘太郎を白川がさらに一発。

勘太郎「ぎゃー！ー！ー！！！！」

白川「行くぞ」

勘太郎「え、どこに」

白川「大阪だ」

白川と勘太郎、列車の席で隣同士に座る。勘太郎、ハンバーガーを食べる。

勘太郎「…うまいですね」

白川「そうだろう。予言してやる。こいつは

数十年後、世界で一番売れる飯になるぞ」

勘太郎「そんなわけないやないですか」

間。

勘太郎「白川さん」

白川「なんだ」

勘太郎「白川さんはなんで俺なんかにそんなに優しくしてくれるんですか」

白川「それはな：お前に料理人の才能を見たからだよ」

勘太郎「料理がうまかったからですか」

白川、笑う。

白川「そんなわけあるか、あの頃のお前なんて下の下だ」

勘太郎「じゃ、じゃあなんで」

白川「でもな、料理人に必要な：客を満たそうとする心意気があった。行き倒れていた俺に飯を与え、寒がる客に豚汁を与える。それだよ、その真心こそが料理人の本質なんだ」

勘太郎、自重したかのような笑いを浮かべる。

勘太郎「そっか：俺は最初から勘違いしてた

んやな」

白川「：そんなもんだ、人なんて」

列車の音が鳴り、二人が降りる。

15 大阪・春川亭跡（夜）

場転。大阪の春川亭跡。

白川「着いたぞ。言わなくてもわかるな」

勘太郎「店が：春川亭が：」

白川「ここだけじゃない、空襲でほとんど焼け焦げてしまった。これが戦争の現実だ」

勘太郎、膝から崩れ落ちる。

勘太郎「この店は：オトンとオカンが2人で立ち上げた店やったんや」

白川、黙って話を聞く。

勘太郎「オトンとオカンは元々許嫁がおったけど、駆け落ち同然で大阪に逃れたっていったった」

白川「そりゃまた豪気なことだな」

勘太郎「オトンは客が喜ぶ顔が好きで、いつもこっそり大盛にしていた。それを見てオカ

ンは呆れながら笑って：俺もそんな2人を見ていて子供ながらに幸せやった。オト  
ンが日中戦争で連れてかれて死んでから  
も：オカンは気丈に店を切り盛りしていた。  
2人が：2人が繋いでいった店やったん  
や：！なのに、俺は：俺は：」

白川、帽子を外し、黙とうをする。

白川「すまん、東京にお前を誘った俺の責任  
だ」

勘太郎、首を振る。

勘太郎「白川さんは何も悪ない：俺が：俺が  
全部悪いんや」

白川「：お前にかけられる言葉を持つてるの  
は俺じゃなさそうだな」

勘太郎「え」

文子（28）が現れる。

文子「かんちゃん」

勘太郎「文子：」

文子が駆け寄ってくる。感動の再会  
：  
と思いきや



文子「はああああああああ！！！！」

文子、勘太郎を鮮やかに投げ飛ばす。

勘太郎「ぎゃああああああああ！！！」

ごろんごろんと転がっていく勘太郎。

白川「すっきりしたか」

文子「白川さん、ありがとうございます。で

も、数年以上の借りはこれだけじゃすまへ  
ん」

勘太郎「お前、どこでこんな技を」

文子「あんたが祥子さんを守れって言った

から、柔道を学んだんよ。黒帯や」

勘太郎「：何もそこまで」

文子「なんで今まで顔を見せへんかってん」

勘太郎「すまん」

文子「戦争から帰ったんやったら、連絡の一

つもよこしたらよかったやん」

勘太郎「すまん」

文子「祥子さん、最後の最後まで笑ってたよ。

でもうちはそんな祥子さんを置いて…」

勘太郎「文子…」

文子 「ごめん：祥子さんを守れなかった：」

勘太郎、膝をついて嗚咽する文子を抱きしめる。

勘太郎 「すまん：」

文子、立ち上がる。

文子 「かんちゃん、連れていきたい所がある

んやけど：いい？」

勘太郎 「え」

文子、白川を見る。白川、頷く。

白川 「お前が帰るべき場所だ」

暗転。

1 6 大阪・炊き出し会場（夜）

明転。グー、という音が鳴る。多くの人の喧噪が聞こえる。中央に配置されたテーブルに鍋を置き、準備をする親七（28）。下履きと一張羅しか身に纏っていない。そこへ意地（28）が走りこんでくる。

意地 「親七くん、準備できたー？」

親七 「まだに決まっとるやろ！ 箸より重いもん持ったことないんやぞ！」

意地 「自慢することじゃない。豪田さんがいればなあ」

親七 「戦争でいなくなった男の話はするな：くうっ」

意地 「ごめん」

涙をぬぐう親七。大荷物を背負った増

田（53）と野江（50）と金八

（44）がやってくる。

金八 「ああ、重い。腰が…」

野江 「食材かき集めてきたぞ」

親七 「よーやった。親七財閥再興の折にはお前ら雇ったるでえ」

増田 「別にええかなあ」

野江 「うん」

意地 「人望のなさよ」

親七 「うるさい！ というか文子はどこいったんや！ 言い出しっぺのくせにサボってるんとちゃうか、あのトンマ」

文子が白川と勘太郎を連れてやってくる。

文子「誰がトンマよ！　また投げ飛ばしたろうか！？」

親七「ひええ、ごめんなさい：！　：あれ、

勘太郎やないか！」

増田「え、かんちゃん！？」

野江「生きとったんか！」

勘太郎「ここは：なんなんや」

文子「炊き出しや」

野江「みんな空襲で家も働き口もなくなってもうてなあ。配給もなかなか来ないし：みんな腹空かしてたんや。そこで文子ちゃんが提案してくれて、元気な町の衆で農村に買い出し行って、定期的に炊き出しをやつとるんや」

意地「親七君は自分の服まで売り払って、調理器具をそろえてくれたんやぞ」

増田「でもみんな料理については素人やかな。なかなか納得いくもんができんくて

な」

金八「親七なんて大根もまともに切られへん  
しなあ」

親七「うっさいわ！」

白川「：勘太郎、もうわかるだろ。お前の出  
番だ」

勘太郎「白川さん」

白川「腹をすかした客がこんなにいるんだ。

最高の舞台だろ」

文子「かんちゃん」

文子が祥子の手ぬぐいを渡す。

勘太郎「これ：おかんの」

文子「祥子さんの本当の想い、かんちゃんが  
受け取ってあげて」

勘太郎、祥子の手ぬぐいを握りしめ、  
それを頭に巻く。

勘太郎「ここまでおぜん立てされて：やらん  
わけにはいかんよな」

勘太郎、厨房に移動しながら指示を出  
す。

勘太郎「野江さん増田さんと金八先生は食材をどんどん運んでくれ。文子は俺の横で補助！ 白川さんと親七と意地はホール！ 客を整理して、苦手なものがないかも聞いてくれ」

勘太郎以外の一同「おう！」

野江「ある食材はこれだけや」

どさっとテーブルに摘まれる食材を見る勘太郎。

増田「じゃがいもに合いびき肉に玉ねぎ：塩と油もあるな」

金八「こんだけでいけるんかいな」

勘太郎「：十分や！ 文子はじゃがいもの皮を剥いていってくれ。おっちゃん、牛乳ってどこかにないか！」

野江「増田さん、配給のやつが余っとるんちゃうか！ まだいけるやろ！」

増田「おお、そうや、取りに行こう！」

増田と野江と金八が慌てて去っていく。勘太郎の様子をぼーっと見つめる文子。

勘太郎「：？ 文子、どうした」

文子「い、いや！ なんでもあらへん！ 皮

むきやな、皮むき：」

勘太郎「まだまだここからや！ 気抜くな

よ！」

文子「うん！」

勘太郎、玉ねぎをみじん切にする。ゆ  
つくりと勘太郎にスポットがあたる。

勘太郎の心境を描くかのように舞台前  
で過去のやり取りが繰り広げられる。

少年時代の勘太郎と祥子が向かい合っ  
て飯を食べている。見るからに質素な  
献立。ぐー：：と腹の音が鳴る。

祥子「勘太郎、ごはん足りないんか？」

勘太郎、気を使っているのか首を振る。

勘太郎、またしても腹の音が鳴る。よ  
だれを垂らしながらもまだ我慢する。

祥子「子供が我慢せんでええねん」

祥子、笑いながら勘太郎に無理やりご  
はんを食べさせる。

祥子「おいしいか？」

少年勘太郎、こくりと頷く。

少年勘太郎「でも、オカンの方がお腹すいて

るんとちゃうんか」

祥子「そんなわけないやろ！ お母さん、お

腹いっぱいやで」

と、ここで祥子のお腹がぐーと鳴る。

間。

少年勘太郎「あーっやっぱり！」

祥子「えーい！ やかましい！」

祥子、少年勘太郎に無理やり米を食べ

させる。少年勘太郎、口いっぱいに米

を頬張りながら、涙を流す。

少年勘太郎「おかん……」

祥子「ええねん、ええねん。うちは勘太郎が

お腹いっぱいになってるところが見られれ

ばそれでええ」

祥子、食卓を片付けはじめ。その姿

を見ている勘太郎。

勘太郎「そう言ったオカンの顔。あの飯の味



が今でも忘れられへん。オカンはなんで笑  
ってたんやろうか。もっと早く気づいてい  
れば、俺は……」

少年勘太郎「オカン！」

少年勘太郎が祥子に抱きつく。

祥子「はいはい。お腹いっぱいになったか？」

少年勘太郎「うん！」

祥子「ならよかった」

勘太郎「ああ：そうか、そうやったんやな」

幼い勘太郎を抱きしめる祥子。そして  
手を引いて去っていく。

勘太郎「オカン、あんたは：そういう人やつ  
たな」

照明が戻る。

勘太郎「アツシエ・パルマンティエ、完成  
や」

テーブルに並ぶ大量の皿。白川と親七  
と意地がやってくる。

親七「な、なんやこれ！ おい、ちょっとひ  
とつまみ：うんまっ！」

文子 「ちょっとあんた何してんの！」

意地 「俺も腹減ってんだよお……」

ぐー、というお腹の音。

勘太郎 「みんなの分もちゃんとある！ どん

どん食ってええで！」

勘太郎の声に湧く一同。

白川 「勘太郎、みんな腹をすかしてる。いい  
な？」

モブ町人の声 「おい、まだかあ。腹減った

ぞ！」

勘太郎 「いま行く！！ よっしゃーみんな食

え食えー！！！」

皿を持って去っていく一同。そんな中、

祥子の声 「勘太郎ー！！！」

勘太郎、振り返る。そこには祥子の姿。

祥子 「もう大丈夫やな」

祥子、勘太郎を見て一言。

勘太郎 「うん」

去っていく勘太郎、それを見守る祥子。

暗転。「1958年7月」という文字

が映し出される。穏やかな曲と共に各キャラクターのその後が展開されていく。明転すると、下履き一丁に一張羅姿で仁王たちする親七（38）の姿。そこへ意地（38）がやってくる。

意地 「社長ー！ 社長！ 問い合わせが！」

親七 「はっはっは！！ どんどん量産せえ！ 下履き一丁から始める生活、下着会社、親七商会はこっからやあ！！」

意地 「いえ注文じゃなくて文句です！ 受注先が注文したものと個数が違うって！」

親七 「なにい！ 任せろ！！ 渾身の土下座を見せたる！！！」

親七と意地が去っていく。入れ替わりに入ってくる金八（52）。ざわめく教室の声も挿入される。

金八 「えー人という字は人と人が支え合っているんですよねえ。人は人によって支えられ」

教室の声が大きくなり、金八の声がかき消される。金八、黙る。少しずつ静かになっていく教室の声。そして声がやむ。

金八「はい、皆さんが静かになるまで1分かかりました。じゃあ授業を再開します。人という字は」

教室の声がさらに大きくなる。

金八「千太郎、もうやめろって。おい…、喧嘩するな、やーめろ。やーめろって…、もういいよおお！ もう先生やめる！

田舎に帰って農業するうう！」

泣きながら去る金八。入れ替わりに入ってくる白川（65）。台車を引っ張りながらハンバーガーを手売りしている。

白川「はい、アメリカ仕込みの手作りバーガー、月日バーガーはいかがですか」

そこにノロノロと歩いてくる伊勢崎（60）。ボロボロの恰好。

白川 「：おい、あんた」

伊勢崎 「はい？」

白川 「どこかで見た顔だな、俺のこと覚えてるか？」

伊勢崎 「すみません：戦争前の記憶が曖昧でして：」

ぐー、と腹が鳴る伊勢崎。

白川 「そうか。腹が減っちゃ戻る記憶も戻らんだろ。ハンバーガー1つどうだい」

伊勢崎 「え：あ、ああ」

ハンバーガーを手に取って、食べる伊勢崎。

伊勢崎 「：うまい」

伊勢崎、涙をこぼす。

伊勢崎 「すみません、こんなにうまい飯は：はじめてで」

白川 「記憶が戻るまで俺のところで働くのはどうだ？ どうも放っとけないんだよな」

豪田 「：いいんですか」

白川 「ああ」

去っていく白川と伊勢崎。入れ替わりで椅子に座る野江（62）と増田（65）。酒を飲みながらグダグダとしている雰囲気。

増田 「戦争のときはどうなることかと思ったけどよ、意外となんとかなるんやなあ」

野江 「どうしたんや急に」

増田 「戦争が終わった後なんてどこもかしこも焼け野原や。それが今や神武景気やなんやいうて、日本は飛ぶ鳥を落とす勢いやろ」

そこへ文子（38）がやってくる。

文子 「はい、ステーキ定食お待ち」

野江 「うおお、これを待ってたんや」

文子 「これ、北海道のある牧場から直接仕入れた、いい肉なんよ。食べて食べて！」

増田 「さすが美人女将！」

文子 「調子ええなあ」

野江 「そーいや大将は？」

文子 「ああ、うちのボンがまたやらかしてな。

出前ついでに叱りにいくいうて飛び出して  
いったわ」

増田 「相変わらずやなあ」

文子 「よく似とるわ、ほんま」

文子、増田、野江側の照明が暗くなり、  
去る。舞台前面に立つ千太郎（8）  
の姿。（千太郎の役者は勘太郎の幼少  
期と同じ人が望ましい）体育座りをし  
て、地面に絵を書いている。

勘太郎の声 「千太郎ー！ー！ー！」

びくっと反応する千太郎。勘太郎（3  
8）が駆け出してくる。

勘太郎 「お前また喧嘩したんやって！ 先生  
から電話きてたで！」

千太郎 「だってあいつらが俺のことバカにす  
るんやもん」

勘太郎 「だからって殴るのはあかんやろ」

千太郎 「じゃあオトンは人のこと殴ったこと  
ないんか」

間。

勘太郎 「屁理屈いうな」

勘太郎が千太郎にげんこつ。

千太郎 「いってえ！」

勘太郎 「千太郎、料理も人との関係も真心や。

傷つける人間じゃなく、満たせる人間にな

るんや」

千太郎 「：よくわからん」

「ぐー」と腹の音が鳴る。

千太郎 「腹減った」

勘太郎 「しゃーないのお」

勘太郎、懐からおにぎりを出す。

千太郎 「あ：」

勘太郎 「どうせ腹減つとるやろと思ってな」

千太郎、おにぎりを受け取り、おずお

ずと食べたそうとする。　：と、また腹

の音が「ぐー」と鳴る。

千太郎 「オトン、腹減つとるんか」

勘太郎 「昼飯食うの忘れてたからな」

千太郎、迷いつつ勘太郎におにぎりの

半分を差し出す。



勘太郎 「ん？」

千太郎 「一緒に食べようや」

勘太郎、笑い、千太郎の頭をなでる。

勘太郎 「お前は俺より才能あるな」

勘太郎と千太郎、顔を見合わせておに

ぎりを食べ、咀嚼。そして、

勘太郎・千太郎 「うっま！」

終